

シンポジウム① 「自然治癒力を科学する」

座長：酒谷 薫（日本大学工学部次世代工学技術研究センター，医学部脳神経外科 教授）

「自然治癒の科学的理解」

阿岸鉄三（東京女子医科大学 名誉教授）

「ヨーロッパの伝統医療ホメオパシーとエビデンス」

川嶋 朗（東京女子医科大学附属青山女性・自然医療研究所 自然医療部門 助教授）

「自然治癒力と脳：プラセボ効果の要因解析からわかること」

中島恵美（慶應義塾大学薬学部 薬剤学講座 教授）

「脳科学から見た自然治癒力－前頭前野と陰陽－」

酒谷 薫（日本大学工学部次世代工学技術研究センター，医学部脳神経外科 教授）

「自然治癒の科学的理解」

Scientific Understanding of Natural Healing

阿岸鉄三

東京女子医大名誉教授 大分大学臨床医工学講座・客員教授 桐蔭横浜大学医工学部客員教授

Tetsuzo Agishi

Emeritus Professor, Tokyo Women's Medical University, Visiting Professor, Oita University & Tooin Yokohama University

普通、医療との関連で自然治癒が論議される時、16世紀のフランスの外科医ペレの「神が癒し給うた」の言葉が引き合いにだされる。そこでは、自然治癒力は神（キリスト教の神、普遍的には造物主）のなす技であり、医療者は、それにお手伝いをするという思考にもとづく。では、科学至上主義・科学万能主義の当代 contemporary で、「自然治癒力を科学する」ことは、可能であろうか。ここで、治癒は、おそらく不動の真理であるのに対して、科学は発展もするが退化の可能性も孕む技術論的思考であることを指摘すべきであろう。治癒（力）は、当代科学的に理解できないが、発展する未来の科学では理解できるようになる可能性は否定できない。

しかし、治癒（力）そのものの本質は理解できなくても、治癒の経過中におきる事象を、部分的ながら、当代科学的に推定的に理解できる場合があると考えられる。

あるとき、辞書のなかで、heal（癒される・治る）と health（健康・健やかであること）が近辺にあることに気づき、語源的に同類ではなかろうかと考えたことがある。健やかであることとは、癒されることなどではなかろうか。

心身に、過大な損傷では、生体そのものが死にいたることもあるが、ある限度内のわずかな損傷・瑕疵が生じたときには、本態不明の自然治癒力が発現される。たとえば、癌に対する摘除手術をして治癒・再生組織は、基本的には健全な組織である。でなければ、手術は本質的に成立しない。健康を目指すスポーツでは、筋肉などに軽微な損傷が生じるが、健全な組織の再生によって健やかさが達成されるのではなかろうか。Heal → health である。日本アフェレシス学会では、定期的に繰り返す瀉血が健康を増進するのではなかろうかという論議が始まりそうな気配がある。瀉血によって種々のホルモン・サイトカイン・ケモカインなどを含む血中大分子が除去される。このことが、自然治癒力（能）を活性化させるという仮説である。

一方で、病などからの回復・治癒を祈ることも、現実的におこなわれている。最近では、祈り際におこる脳の活性化が f-MRI で追跡されている。

ヨーロッパの伝統医療ホメオパシーとエビデンス Homeopathy & Evidence

川嶋 朗

東京女子医科大学附属青山女性・自然医療研究所 自然医療部門

Akira Kawashima

Division of Natural Medicine, Aoyama Institute of Women's and Natural Medicine,
Tokyo Women's Medical University

ホメオパシーは、ドイツ人の医師、Christian Samuel Hahnemann (1755 ~ 1843) が体系化した医療である。

「Homeopathy」という用語はギリシャ語の「homeos (類似の)」と「pathos (苦しみ)」という言葉に由来する。

患者の病状と似た症状を引き起こす薬 (レメディ) をごくごく微量投与することによってその病気を治すという理論に基づく治療体系である。レメディは、本来、体に備わっているといわれる自然治癒力に働きかけ、病気の人が全体のバランスを取り戻し、回復していく過程に作用していると考えられている。

2010年7月に読売新聞にある事件が掲載された。

「ビタミンK 与えず乳児死亡」

山口市の助産師 (43) が、出産を担当した同市の女兒に、厚生労働省が指針で与えるよう促しているビタミンK を与えず、代わりに「自然治癒力を促す」という錠剤 (ホメオパシー薬) を与え、この女兒は生後2カ月で死亡していたことが分かった。(2010年7月9日 読売新聞)。

この事件を受け、2010年8月、日本学術会議会長が朝日新聞の一面記事で (異なった結果の論文も多数あるのに) たった1つの論文 (論文の質自体も疑問である) の結果をもとに「ホメオパシーの効果には科学的根拠がなく、荒唐無稽」とコメントし、日本医師会、日本医学会その他も追随した。さらに、日本医学会から各学会にもこの声明が直接送られた。この事件はホメオパシーのある団体に所属する助産師が訴えられたケースである。この事件の本質は、ホメオパシーという医療体系自体が悪いのではなく、ホメオパシー提供者である助産師が、通常の医療を否定したところに問題がある。つまり、ホメオパシーそのものというより扱う人間と教育が危険なのである。確かに、メカニズムに関しては不明と言わざるを得ないが、メカニズムのわからないことは (麻酔薬など) 西洋医学にもある。科学的根拠というのは臨床医学において、臨床試験の結果をいうのであって、メカニズムが明らかであるものとは限らない。たった1つの論文の結論で長い歴史のある伝統医療を否定するということが日本を代表する科学者が行ってよかったか否かは議論しなければならない。

ホメオパシーについては数多くの臨床試験がなされている。本講シンポジウムでも代表的な臨床試験やメタ分析の論文を紹介させていただく。

医師 (歯科医師、獣医師、薬剤師) でホメオパシー習得を希望される諸氏は日本ホメオパシー医学会 (<http://www.jpsh.org/>, E-mail: info@jpsh.jp, FAX: 03-6280-8859) の研修コースを履修されたい。

自然治癒力と脳：プラセボ効果の要因解析からわかること

Natural power to heal and a brain: The factor analysis of the placebo effects

中島恵美

慶應義塾大学薬学部 薬剤学講座

Emi Nakajima

Division of Pharmaceutics, Department of Pharmaceutical Sciences, Keio University Faculty of Pharmacy

「病は気から」や「鯛の頭も信心から」の効果について、科学的根拠はあるのだろうか。近年、脳と身体の関係解明がすすみ、治癒力を高める心理効果が明らかになってきた。心理効果のひとつにプラセボ効果がある。プラセボ効果は長く新薬開発のノイズとして嫌われてきた。しかし、今、治療におけるプラセボ効果の有効利用が論じられている。プラセボ効果の要因解析は自然治癒力を高める心の要因となる。

1. 偽薬（プラセボ）に反応する脳内レセプター：これまで、多くのプラセボ効果は実態がなく、偽薬効果で、意味がないとされ、研究の対象外に置かれていた。プラセボ効果研究の最近の特筆すべき進歩は、非侵襲的な手法で脳内の機能測定が可能になり、実際に患者の脳内でプラセボ反応が起きていると確認できるようになったことである。医学的症状とプラセボ効果に連動する生理的および心理的条件がわかってきた。薬理効果と脳内レセプターを共有するプラセボ効果の存在も報告されている。
2. プラセボ効果の誘導要因：プラセボ効果はどんな場合に誘導されるのだろうか。そして、それを治療に使うことはできるのだろうか。プラセボ効果の誘導要因に、条件付け、パブロフ反応、期待、認知、がある。期待感が起こすネガティブな反応としてノセボ反応が知られており、悪化因子となっている。
3. プラセボ効果の個人差：プラセボ効果の個人差の原因を科学的に検証することはできるのだろうか。プラセボ効果のレスポンドーとノンレスポンドーについて、主観的訴えを客観的に測定することで検証する試みがなされている。個人差の診断方法の開発が課題である。
4. 薬理効果の主観的評価と客観的評価方法：プラセボ効果の実態は脳にある。実際に、実薬の効果に勝つプラセボ効果も多くみられる。この理由として、五感による主観的評価ではプラセボ効果を過大評価してしまうことが考えられる。血液検査値など機器計測値による客観的評価を用いた場合、プラセボ効果の割合が低くなる。
5. プラセボの奏功する領域：パーキンソン病やうつ病はプラセボが奏功する疾患である。プラセボ効果やノセボ効果に代表されるように、心理効果は治癒に密接に関係する。うつ状態では扁桃体の活性化（感情の高ぶり、怒り、悲しみ、混乱、抑うつ）と大脳前頭前野の不活性化（誤解、思い込み、拡大解釈）がみられる。改善のために、抗うつ薬により扁桃体を沈静化し、一方で、認知を変えるカウンセリング（認知療法）で大脳前頭前野を活性化することが行われる。両者が併用されてうつ症状が改善する。認知に関わる脳の活動部位として、ワーキングメモリー領域の研究が進んでいる。

プラセボ効果で代表される心的制御機構の研究は緒についたばかりである。今後、機構の分類が進み、治療への応用が期待される。

脳科学から見た自然治癒力—前頭前野と陰陽—

酒谷 薫

日本大学 工学部次世代工学技術研究センター, 医学部脳神経外科

中医学では自然治癒力が重視されてきたが、その実態は未だ明らかではない。本講演では、我々が行ってきたストレスとリラクゼーションに関する脳科学研究を基に自然治癒力について考察する。

生体がストレスに曝されると、ストレスに順応するために交感神経—副腎髄質系（自律神経系）及び視床下部—下垂体—副腎皮質系（内分泌系）が活性化する。このようなストレス反応は生体のホメオスタシスを維持するうえで重要な役割を果たしているが、ストレス反応が長期間続くとうつ病などの精神的疾患や生活習慣病をはじめ様々な身体的疾患が誘発される。一方、効果的なリラクゼーションは過剰なストレス反応を緩和し、これらのストレス性疾患を改善することが知られている。

脳機能イメージング法の発展に伴い、ヒトのストレス反応における大脳皮質の役割が研究されるようになってきた。特に前頭前野は、種々の認知機能に関与しているだけでなく、ストレス反応の制御に重要な役割を果たしていることが報告されている。我々は、光による脳機能イメージング法（近赤外分光法）を用いて、ストレス反応とリラクゼーション効果における前頭前野の役割について研究し、次のことを明らかにした。ストレスに対して前頭前野が右優位の活動を示す例は、左優位例よりも脈拍数の上昇や課題前の顔面皮膚の皮脂量・アクネ菌量は有意に高値を示す。さらに右優位の活動を示し皮脂量の多い症例に対してアロマセラピーを1カ月間実施すると、皮脂量は有意に低下し、前頭前野は左優位の活動パターンに変化した。これらの結果は、リラクゼーションはストレスに対する前頭前野の活動パターンを変化させることにより、ストレス反応を緩和することを示唆している。

未病とはストレスのことかもしれない。中医学の養生法にはリラクゼーション効果が期待できるものが少なくない。このように考えると、自然治癒力とはストレスにより右優位になった前頭前野活動をリラクゼーションにより左優位の活動パターンに変化させることかもしれない。中医学では自然治癒力には陰陽のバランスが必要と考えられているが、ストレス反応から見ると右の前頭前野を「陽」、左の前頭前野を「陰」と考えることができるかもしれない。